
きっかけ

カツオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

きつかけ

【Zコード】

Z0774A

【作者名】

カツオ

【あらすじ】

高校一年生の大塚は、中田先輩がリーダーのおやじ狩りグループ「バンズ」に入っていた。そんな落ちこぼれな大塚を変えるきっかけになつたのがホームレスだった。この少年が変わるまでのいきさつを見てください

第1話 バンズ

1話 ホームレスと自分
オレらは、真夜中の暗い公園の中で、残業なのか、遅く帰ってきた
サラリーマンを捕まえていた。

「ほ、本当に金は女房が持っているんだ！？」

と鞄とスーパーの袋を抱きかかえながら、サラリーマンは震えて
いた。

すると、オレの先輩の中田先輩は、サラリーマンにガンくれながら
言った。

「フーン…。金は女房がねー」 中田先輩がそつそつと、サラリーマンは何回も首を縦に振った。

中田先輩は自前の鉄パイプで自分の肩を叩きながら、サラリーマンを見ていた。

すると、中田先輩は何かに目が入った。中田先輩は、ずっとそれを
みた後、

「これは何かなー」

といって、鉄パイプでスーパーの袋の持ち手をひっかけて、中田
先輩の所まで持ってきた。「結構有名なスーパーだな」

そう言いながら袋から物を出した。

白ワインとチーズだ。見るからに高そうだ。

「ほう。白ワインねー。こんなもん買えるなら金あんじやねーか！」

「！」

そう言って中田先輩は、白ワインの瓶でサラリーマンの頭をおも
いつきり叩いた。

瓶は割れて、サラリーマンの頭が切れた。

「ぎゃああああーー！」

サラリーマンは痛そうに倒れ込んだ。

中田先輩は、本当に暴力的だ。

中田先輩はオレの

通っている高校の先輩で
さんざん怒鳴り飛ばした先生をぶん殴つて退学処分になつた先輩だ。

中田先輩のおかげでうるさい先生が消えたと感謝されている。

白ワインと血が混ざつてとてもキモい。

「古田！臭い嗅げ！」

古田先輩は

「分かつた」

と言つて臭いを嗅いだ。

「イタリア製で1952年製で2万円ぐらいい

よくこんな血が混ざつた白ワインでこんなに詳しく分かるんだろ。
高2の古田先輩は、休み時間に生徒に酒を売つていたため、退学
処分になつた。

小学生のころから酒ばっか飲んでいて、今まで飲んだことのない酒
は、アルコール分が90%くらいある酒だけだ。
酒のうんちくなら何でも言えるらしい。

「ほー、2万円ねー…」

すると、中田先輩は鉄パイプでサラリーマンを叩いた。
ちょっとだけだが血を吐いている。

「おめーらー！やれー！あーあ、おじさん、ドンマイ。早く金を
渡せばよかったですのに。じゃあね。奥さんにもみじくと云つていて
くれ」

そして、サラリーマンはボコボコにされた。

その後、中田先輩は財布から10万くらい出した。

サラリーマンは虫の息だ。たまにピクピク震えている。

オレは、ケータイでメールを見ている。

すると、中田先輩に肩を叩かれた。

オレは振り向くと、中田先輩がオレに1万をくれた。

「今日は少なくて悪かつたな、本当にカミさんを持つていたんだな」

オレは、1万を受け取って、

「ありがとうございます」

といった。

オレがやっているのは、そう、おやじ狩りだ。

みんな少ない小遣いじゃ生活できないため、おやじ狩りをやってい
る。荒川区では有名だ。

最近、ニュースでも取り上げられている。

オレらのチームは8人だけだ。名前は

「バンズ」

。中田先輩が決めた。オレがこの

「バンズ」

に入った理由は、オレと中田先輩は中学時代から友達だった。
もちろん、高校生になつても友達だった。

退学になつた時も遊んでいた。ある日、中田先輩に金が無いと相談
したら、この

「バンズ」

に入っていた。

「バンズ」

のメンバーは、リーダーの中田先輩。

酒に詳しい古田先輩。

ブレイクダンスが上手い大谷先輩。

ギターがめちゃくちゃ上手い佐山先輩。

パンチの威力が120もある速水先輩。
ビリヤードが上手い畠山先輩。

オレの幼稚園から親友だった高田。そして、オレ、大塚の8人だ。

第2話 ホームレスとの出会い。（前書き）

第一話は、バンズだったのですが本文にはホームレスと自分になつていました。ごめんなさい。

第2話 ホームレスの出来事。

第2話 ホームレスの出来事。

オレたち

「バンズ」

は、その後もどんどんおやじ狩つをして、どんどん金儲けをした。
おやじ狩りはす」と。

ただおやじをボロボロにするだけで2万3万と稼げる。
6千円の小遣いなんてもうチョロ。

ある日、腹が減つたからパン屋に行かないと飢いてお隣に出たら、
母さんに呼び止められた。

「なんだよ。どこ行ってもここにこじやねーかよ。」

すると、母さんが

「わざわざ1時なのよー勉強はしないしたのよーそんなに夜遊び
ばっかしきゃあ…」

「わせなあ…おめえも昔はちゃんと男ひつかまえて遊んで
たくせによお…」

そうこうでオレは出ていった。

母さんは昔、おもいつきつ浮氣をしていて、父さんが出張の間とか
は、男を家に連れてきたりしていた。
まだバレていないが、今はしていない。

パン屋の弁当にしようか迷つていたとき、「元気」と、見ながらにホー
ムレスっぽいおじさんがあつてきました。

オレたち

「バンズ」

は、その後もどんどんおやじ狩りをして、どんどん金儲けをした。

おやじ狩りはす“い”。

ただおやじをボコボコにするだけで2万3万と稼げる。

6千円の小遣いなんてもうチヨロ。

ある日、腹が減ったからコンビニに行こうと思つて玄関に出たら、母さんに呼び止められた。

「なんだよ。どこ行ってもここじゃねーかよ。」

すると、母さんが

「もうすぐ一一時なのよー勉強はべつしたのよーそんなに夜遊びばっかしちゃあ…」

「うせえなあ…おめえも昔はちゃんと男ひつつかまえて遊んでたくせになよ…」

そうこつてオレは出ていった。

母さんは昔、おもこつきつい浮氣をしていて、父さんが出張の間とかは、男を家に連れてきたりしていた。

まだバレていないが、今はしていない。

コンビニの弁当にじょうか迷つていたときに、見ゆからにホームレスっぽいおじさんがあることきた。

ホームレスは店員に話しかけていた。

すると店員はしぶしぶ事務員室に入つて、弁当を持つてきた。

オレは、いいなー無料でもらつてるのはーと思った。

ホームレスは

「悪いね」

と言つてコンビニから出でいった。

オレは弁当と炭酸飲料を持つていつてレジに並んだ。

そして、店員がレジを打つている間、オレは店員に聞いた。

「よく、ホームレスと話せますよね」

すると、店員が

「うん、最初ホームレスが来たとき、つわつなんだこいつと思つたけど、いざ話してみるとといい人なんだよね」

でもオレは納得出来なくて

「でも、所詮はホームレス…」

「所詮じゃない。あなたとあの人は、同じなの。だってこの地球のこの日本でこの県で生まれてこの市のこの町に生まれた。ほら、五つも同じじゃない」

確かにそうだ。

でも、この人とオレが違う」との方がたくさんあるじゃないか！年もちがう。

オレには家があるけどこの人には家がないじゃないか！他にも髪型、身長、体重、母校、名前、目や耳の形だつて違う。

あと、この人はおやじ狩りをやつていない。

オレはコンビニを出ると、ホームレスはガツガツと賞味期限が切れた弁当をくつていた。

オレはホームレスの前に立つていた。

「つまーいの…、この弁当…」

すると、ホームレスは驚いた顔を見せた。そして、話した。

「つまーいよ。でも、ホームレスになる前は、よくこんなもの食えるなと思ったよ。でもいざホームレスになると、これが「」ちやうになるんだ。例えば、おめーが名前も知らない国に来ちゃって、その国の主食がいもむしの姿焼きだったら、食べるか？でも、その国に2年間ぐらいいいたら、慣れると思うんだ。そうかんがえると入つて変

わるもんだよ

ホームレスは話を終えるとまた弁当を食い始めた。オレは帰った。
でも、あのホームレスも、食うために一生懸命なんだ。
ところがオレはどうだ。

人が一生懸命働いて得た金を暴力で奪つおやじ狩りで奪う。
それって犯罪じゃないか。

オレは気が付かなかつた。

ただ、金が欲しくてやつていた行為が犯罪だなんて…。

すると、何やらバイクをふかしている音が聞こえる。
ケータイを見ると、もう一時になつていた。
まあ、この時間じゃ当たり前かと思つたら、それは、中田先輩だつた。

「中田先輩！？」

「おお！大塚…どうした！こんな時間まで」

「ちよつとコンビニに行つっていたのです。ところで、この人は？」

「おう、柿沼さんだ」

すると、ヘルメットを外すとなかなかのイケメンが出てきた。
「こんばんは」

柿沼さんが挨拶してきたので、オレもお辞儀した。

「大塚、柿沼さんもバンズに入るからよろしく頼む

すると、柿沼さんもお辞儀して

「よろしく

といつて、バイクで去つていった。

「かつ
け
ー」

「ただいま」

オレは家に帰ると、眉間にシワを寄せて怪訝そうな顔で腕を組んでいる。オレは
「じりせ、ロクな事じやない」
と思つて、素通りしようと思つたが、
「高校生が一時までコハビニか…」

オレは父さんを睨んだ。

「お前は、高校をじり思つてるーー。」

「だから辞めるつていつてんだろーー。」「勉強につけていけないと
か、会社が倒産したとか言つよーー。」

「だから勉強をすればいいんだろ」

「はあー? 実際は追いついているんだよー。」

「じゃあ、辞めなくていいじゃないか」

「だから、オレは…」

「母さん、寝るわ。バカ息子のせいで寝不足になつてしまつ」

「んだよー。ただオレをしかるために起きてるんかよー。」

「ふあーあ…」

「くそーー。」

オレは、むかついて部屋に行き、そこから降りて、集会に向かった。

第三話・深夜の中坊

集合場所に来ると、もうみんな來ていた。

「大塚！遅いぞ！」

中田先輩がオレに気付いて声をかけた。

「すいません！」

オレが入ると、全員が円陣を組んだ。

オレら

「バンド」

は結成からずつと作戦会議の度に円陣を組んでいた。

オレが考えると、まあまあチームバランスはいい方だ。

「中田くん、どうするの？これから？」

と柿沼さんが言った。

すると、中田先輩が、

「どうあえずいつものやるぞー。その後は「コンビニとゲーセンー」

「うおーー！」

そして、活動が始まった。

どんどん罠にはまつていいくサラリーマンを見ると、オレは笑いが止まらない。

今日は大物が何体も捕まつたので結構儲かつた。これだと、朝帰りもできる。

「すごいね、毎日こうなん？」

「そんなことないすよ。全然リーマンが通ないこともあるし」

中田先輩は金を振りながら言つた。

「でも、それはれっきとした犯罪だよね」

「誰だ！？」

中田先輩は怒鳴りながら声のするほうへ振り向いた。オレたちも振り向いた。

怖くて強い

「バンズ」

のリーダー、中田先輩に喧嘩を売つてきたのは、チャリでコンビニに行つた帰りの中学生だった。

「てめえ、バンズに喧嘩を売るとは、覚悟が出来る中坊だな」

中田先輩は殺意のある笑みをして中坊に言った。

その笑みになにも感じないまま中坊は答えた。

「何が？普通の事を言つてるのになんで僕が皆さんに喧嘩を売つてることになるの？」

ブチーン 誰もが聞いたくなる様な音で中田先輩はキレた。

「ふざけんなあ！…てめえら！…やるぞ！…」

「……」

オレ達は無言で立つてると、中田先輩は足で地面を何回も蹴つて、

「いいからやるんだよ！…やるぞ！…」

中田先輩以外はしうがないなと思いながら、オレたちは中坊を殴つた。

殴つてる間、何回先輩は、

「オラ！…死ね！…くたばれ！…死ね！…」

と叫びながら強く蹴つた。

オレは中田先輩は今が夜中つて事を忘れてないかと思つていた。第一、あの中坊は何者なんだ。

こんな時間にコンビニ行くか。

オレらみたいな奴が「うじゅうじゅう」とも分かつてんじやないのか。

犯罪をしている人に犯罪だよと言つたら殴られるに決まってるじゃないのか。ほら、もう動かない。

また死ね！！という声が公園で響いた。

2時間後、中坊はもう動けない状態に陥った。

オレたちは一応中を見たら2万ほど入っていた。

「ちっ、やっぱり中坊だな」

中田先輩は財布を投げた。

速水先輩がビニール袋の中を見たら、

「なんだこれ！？？」

と言つてビニール袋を投げた。そのビニール袋が落ちて、中身
が出てきた。

中身はたばこやビールや日本酒やつまみやマンガ本ばっか。

「なんなんだ。この中坊？」

高田は呟いた。

その後、誰もが知らなかつたと思つ。

「バンズ」

がバラバラになるなんて。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0774a/>

きっかけ

2010年10月14日15時21分発行